

# 成分検出技術を研究へ

危険ドラッグ  
岐阜薬大と県、共同で

危険ドラッグ撲滅に向け、岐阜薬科大(岐阜市)と県保健環境研究所(各務原市)は四月から、薬品の成分分析技術の共同研究を始める。危険ドラッグは次々と新種が出回るため、規制がなかなか追いつかない。共同研究は、危険な薬品かどうかを素早く突き止める技術を開発し、規制をより有効にする狙いがある。

両者が九日、岐阜市役所で記者会見し、発表した。

それぞれに所属する教授や学生、研究者らが相互に研究室を訪問

し、技術開発に取り組む。両者が設立した「岐阜危険ドラッグ解析技術連携協議会」の会合も随時、開催。研究で判明した成果や新たな課題を共有する。研究成果はさらに、薬物依存の研究を進める国立精神・神経医療研究センター(東京)にも提供する。

国は現在、販売を規制する薬物に千四百種類を指定しているが、これらの指定薬物を複数組み合わせるなどして、新種の危険ドラッグが生み出されているという。このため、十分な規制が難しいのが

現状だ。岐阜薬科大の北市清幸教授(医学)は、「危険ドラッグには不明な点が多い。分析を速やかに行って、不必要なものが拡大しないように努めたい」と話している。

(安部伸吾)